昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十五年七月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二五四号）

慈光

第二十二巻　第七号

目次

Q 63.7.29

仏の人格……近角常観……(1)
近角常音先生法話……杉藤美代子……(4)
法華経余話（二）……福島政雄……(12)
讃仏歌「母」……田端明……(17)
本願成就の声（一）……花田正夫……(19)

仏の人格

近角常観

仏は慈悲の塊（かたまり）である。仏は智慧の塊である私は常に考えているに、仏は慈悲ある人、智慧ある人というよりも、むしろ慈悲が凝（こ）りかたまりて人となり、智慧が凝りかたまりて人となりたるが即ち仏であると考えている。

我々は随分罪悪の深いものである、されど情ある人の心はおのずから私の心に映ってくる。我々は随分不明のものである、されど智慧ある人の啓発を蒙れば、智慧の範囲が一歩づつ広くなる。我々は自己をかえりみれば、甚しき冷酷なる者である、甚しき暗黒なる者である、ということは充分自覚しているが、世にはその中に暖かき情なるものがある、又、智慧の光があるということは経験上たしかであると考えている。

はたして情なるもの、智慧なるものがあるとすれば、世には無限の情なるもの、広大の智慧なるものもあると考える。この無限の情がかたまって人となり、無限の智慧が形にあらわれて、我々に無限の感化を与えられるのが仏である。一飯の情も身に感じ、一言の忠告もなお心に徹するものなれば、まして、この無限の情、無限の智慧がいかで我々を動かさざることのあるべき。如何に冷酷なる胸中とはいえども、おのずから暖かき春を生じ、いかに闇黒なる眼中といえども、おのずから希望の光明が輝いてくる。これが私が経験の上より来る仏である。人格ある仏である。我々が人である以上は、人格ある仏でなければ、私の心に適切でない。しかと仏の手に触れねば安心は出来ぬ。歴々照鑒（しようかん）し給う仏あればこそ、日夜冥見に恥じ入りて日暮らしが出来るのである。

仏は実に絶対の境界である。我々如き豆のごとき眼をもって臆測することは出来ぬ。されど、真如とか法性とかいうときは、漠然として取りとめなきもののように考え、あたかも大風に灰を撒（ま）きたるが如き感を生じ、望洋の

嘆を発する弊がある。故に、この絶対中に触合したるときは、我々の個人性も滅却せられ、あたかも大海中に溺死するものであると考えるものがある。こは大なる誤解である仏は此のごとき血もなき、涙もなき、枯木死灰のごときものではない。若し仏が如何なるものかを知らんとすれば、この絶対に融合して、人生上に形をあらわせる仏をみるがよい。即ち、歴史上の仏陀をみるがよい、即ち、迦耶（がや）の釈尊は生ける血と肉とを具えたる絶対である。釈尊の歴史をひもとくときは、如何にも円満完全なる仏陀の人格が我々の眼中に髣髴（ほうふつ）として現れてくる。即ち釈尊の歴史を透して仏陀のおもかげを伺うがよい。

近時歴史的の研究が盛んなるにより、今迄、高閣の上につかねられてあった仏陀の真面目が人世上に活動してきた心持がする。されど私は根拠を歴史上の釈尊のみにおいて信仰を立てることは困難と考える。つまり徹頭徹尾釈尊をもって一人前として眺めるだけでは感服が出来ぬ。若しかく眺める時は、唯一個の達人である、一個の豪傑である。宗教的信仰は決して英雄崇拝のみでは成立しないと考える。

始めなく終りなき、真如絶対の妙境界は、如何にも広大にして、讃仰に堪えない。されどあまり遠くして我々の手が届かぬ心地がする。又、始めあり終りある、歴史上の釈尊は、如何にも適切にして感激に堪えない。されどあまり近くして、永遠安心の根拠としてはなお奥底がある心地がする。しかるに、この二者の間に立てる、始めありて終りなき、因願酬報（しゅうほう）の仏陀なるものがある。これが即ち慈悲の塊である、智慧の塊である。しかして正しく仏陀の人格は此処にあらわれてくる。我々の手の触れる仏である。一たび手が触れた以上は、無量劫を尽し、無辺際を究め、恍惚としてその胸中に鎔融（ようゆう）さるるのである、実に楽の極点である。

実地を白状すれば、私は久しき間、始めあり終りなき仏があるということが合点いかなんだ。全体理屈で云えば、始めなければ終りなく、始めあれば終りあるが当然であるしかるに終りなき仏にして始めあるということは、頗る疑いをさしはさんだけれど、ふりかえってみれば、この始めある点が最もよろこぶべき点である。この始めが我々の安心出来る根拠である。何となれば、仏陀の情は仏陀の始めにおいてあらわれてある。仏陀が我々を救わんためにあらわれたのである。慈悲がかたまり初めて仏の始めが出来上ったのである、智慧がかたまり仏が出来上ったのである。即ち我々を救うため自ら人格化したのである。されば人格ある仏なればこそ始めがあるのである、その始めある点が

ありがたい。これあればこそ、歴々として身にひきうけられ、油然として感謝の念も起る。つまり、最も疑いたる点が最も感謝に堪えない点であった。

以上は全く自己の信仰の経験より割り出した仏陀である。後から気がついてみれば、古より唱えている、仏陀三身説と何の異なる点もない。彼の三身説なるものは信仰の経験の結果により、鉱（あらがね）を鍛え上げた教理である。歴史的批評でその価値を上下出来るものではない。

かく仏陀の人格を冥想すれば、直ちにその仏陀の居所を求め、またその膝下に行きたいという念慮は勃々（ぼつぼつ）としてすこぶる切なる想がする。ここにおいて、今迄研究上において決して通過すべからずと覚悟したる関門は内的経験によって容易に通過したのみならず、かえりみればこれ我々を誘うために久しき以前より先方より開かれたる門戸であった。打明けて言えば、他宗を批評するのではないが、私はキリスト教で、始めなく終りなき神が直ちに人格を有するということは、とても合点が出来ぬ。定めてキリスト教信者をもって自任している人でも、随分苦心している人も多いと想像する。私はむしろ、慈悲と智慧がかたまって出来た、始めある仏陀の人格が嬉しい。これが私の信仰の中心である。

（信仰余瀝より）

フロオベエルの言葉

登張竹風訳

人は皆おの〳〵、その心中に特別の暦（こよみ）を持っていて、それに準じて時を計る。そのはかり方では、数分が数年であったり、数日が数世紀にわたったりする。

○

虚栄は一切事の根底であり、ついには、人の良心と呼ぶところのものも内的虚栄に過ぎないということを確信するようになった。

○

楽は赤色のマントで、その裏地はボロである。人がそれを着ようとすると、風に吹きまくられる。そこでそれまでは随分暖かいものだと思っていた、しかも冷たい綴布（つづれ）に纏われたままで、人は辛棒するのである。

○

女達は、男共を全体として見るとき、甚だしく信じないが、個人的に特別に見るときは必ずしもそうではない。彼等は、われわれ男子を、すべて怪物の如くに判断して、その怪物ぞろいの中にたま〳〵一人天使がいると考えているが、われわれ男子は、怪物でもなければ、天使でもない。

◇　◇　◇　◇

近角常音先生法話

昭和二十三年十月六日　於田川邸

杉藤美代子　記

兄貴は二十七八の時大へん苦しんで仏の大慈大悲を知らされ一代よろこんでおったのです。知らされて、思いがけない大変なことと思ったわけですが、そういうことかと知らされることがむっかしいことです。これを知らされるということにはこちらがああしなければならぬ、こうしなければならぬ、ということは一つもないのです。

この人生には幸せな人、不幸な人もあるが、幸せな人も幸せだけで最後までですえ通るかというとそうではなくて必ずこわれてゆく。幸せであっただけに苦しまねばならないわけです。これだけで終ってしまう人間界であると見れば、何かここに大慈悲ということにでも会わねばなかなか通れるものでなかろうと思うのです。

兄貴は気の小さい正直者でした。人間は少しでもよいことをしなければならない、善くなることが仏教のおしえだろうと小さい時から、こう思い込んで中学、高校、大学とやって来ました。生まれが寺院ですから、自ら信仰の道をたどっていると思って、よくせねばならぬ、よくせねばならぬと思っていました。そして自分が宗教のためにしている、していると思ってそのためにくらがりにおちていきました。というのはこちらが、これだけの誠意を持っているのに人が認めぬと人に対して憤りを感じる種が出来、これが一番くるしんだもとでありました。

しまいには神も仏もない世の中かと悩んでおりました。やればやるほど、おれはこれだけやっているのにと思いますから善いことをしようとする自分の性が悪いのだ、となって、それだから人様のように気楽にほっておける性質になれぬかと思い、半年間極度の神経衰弱となり、終には廃人のようになりました。自分とて自分の善くない心を減らそう〳〵としているが、持って生まれた性分はどうしてみようもなく、血の涙を流してつとめるがうまくいかぬ。こうなれば神や仏は、自分にはとても及ばないことだ、今はもう生きた人間がほしかった、「血の涙をこぼしても、と

めようのないあなたの性が気の毒でたまらぬ」と、せめては理解してくれる人間がほしいと思いました。

さて、善いことをすると人はほめてくれます。人がほめたところで、自分にすれば己の悪いことを知っているからもちません。それかといって人にお前は悪いとそう言われても、自分でその悪いのでこまるのですからどうにもなりません。それで、こちらから悪い性をもって来ても、あれが可哀そうだと終りの終りまで了解してくれる真の友（生きた人）がほしいと念願したわけです。

仏というものがどういうものか見当をつけるにはこの話はいいと思います。

子供を失って悲しんでいる人が、淋しさから人にやつ当りします。そのことを悪いといわれたとてしかたない。それを可哀そうにと、どこまでも見捨てない友人がもしあったなればどうでしょうか。遇然、兄貴の場合、人間界にそうした生きた友人のないのが可哀そうだとして、自ら同情者が「自分がそれだ」として長い間我々に向っていてくれたのだと、わずかながら、そう思ったらしいのです。困った悪性だが、これを見捨てないのが仏である。人間を当てにすることはできない、仏だ。そうした不思議――念仏不思議、名号不思議、誓願不思議と申しますか、つまりあるべきことでないことが向かっていて下さるという不思議なのでありまして、考えて見ますれば、我々自分自身あるべきすじにのっていないのでありまして、自分が道理に外れているものですから、この我々を救済して下さるものは大体あるべきでないところの救済者が向かっていて下さるわけでして、これがつまり不思議ということであります。

兄貴は一代の間「この以外になし」として通ったわけであります。どんな人でも自分では完全と思っていますが、完全ではありません。あるべきでない不思議の力でたすけられる以外ゆきようがないわけです。

たまたま、儒者で聖徳太子を遵奉していた人があり、買っておいた本郷の土地屋敷を受け継ぐことになり、兄貴はそこで一代やって来たのでありますが、大東亜戦争（大平洋戦争とあとであらためられた）の前日、十二月七日に没しました。

親鸞聖人の通った道も同じでありまして二十九才まで自力修行しましたが、どれだけ誠にしても本当の誠ができず偽善となる。口にどれほど念仏となえても心では横のことを考えている、そんな人間がどこまでこれを続けたとて誠にとどくとも思われぬ。こうして苦しんだ聖人が六角堂での夢の導きで、法然上人に会われるのであります。天地の間にその一つしかないという、これが大事なことであります。

さて、兄貴のことで長々とお話ししてきましたが、それは皆さんにおわかりいただくうえによいと思ってのことですが、私は結局想像することでありまして、本当のことは自分の通って来たすじみちをお話しする他ないのであります。いつもお聞き願っているのですが、私は長い間、兄貴のもとにおりまして仏がわかりたいと思っていた。人間のすることに誠のことなしと言われ、考えてみれば、自分が都合よくなりたいために、いろいろやっている、つまり功利的な目的でやっています。自分は誠でないとわかっている。だから何とかして兄貴のように本当のものがわかりたいと思っていました。そうして二十八九になりました。おれみたいなものは駄目だと思いました。こうして、どうかして仏一つがわかりたいとしていたのが、仏がわかってはじめて自分の罪悪を知らされ、それで「仏は」ということになっていったわけであります。

私は長い間、仏ということをきかされ、仏ときけば、南無阿弥陀仏だと思っていました。兄貴の方は、前に申したようにむちやくちやになったところが、仏がありがたいということになっていったことでありますが、私の場合、しまいには、こんなばかなもの求めても仕方ない、うっちやってしまえとやけになって、二、三年たちました。一体求道の経過を話すということは変なものでして、あの「求道」という雑誌を前に出しておりました。あれに告白という欄がありました。自分はこうして知らせてもらったとみちすじを書いてもらったのですが、ああいうものをのせると読む人は、人もこうなら自分も何とかしてと力むようになり、人の通った道を自分も何とか通らねばならぬといったことになるので、いけないとしてやめてしまいました。

亡くなった姉（兄の家内）が茶のみ話しに言ったことがありました。兄貴が私について愚痴をこぼしていたというのであります。

「弟を一生けんめい育てて来たがあれに何の不足はなけれど、がまんのやまぬのがかあいそうでならぬ」

と。宗教のかんじんなのはこれであります。こう聞かされたとき、自分ではこうがまんが強いとは思っていませんでした。さげるところには頭を下げていると思っていました。だからそんなに私が強情ばっていると取っているかと思い、よいと思っても、人がわるく思っているなら、こっちもこっちだと思い、求める気は全くありませんでした。

ところで、よく考えて見ると

「それがやまぬものゆえかわいそうでならぬ。こまったものだ、こまったものだと気にかけている……。」

私の場合、仏様からわかったのでなく、人間どうしの人情からでありました。そんなことが人間界にあるとは思っ

ていなかったのであります。私は兄弟は他人のはじまりとは名言なりと常々考えておったのであります。それだのに頼みもしないのに愚痴をこぼしている。妙な人もあったものだとなって、私は寸分間にあわぬが、かげで心にかけている人がある。ありがたいことだと、それがはじまりでした。このときから人の親切、人のなさけの有難さというものが、はじめてそのありがたさがわかって来ました。それは寸分利益の問題ではない、あらぬものをたえず気にかけているということ、私はほかの兄弟はこんなことを思って下さらぬ、と思った。これが火のつきはじめとなりました

人間界につばき一つかけてくれる人もないとして、自分で立たねばならぬと思っていたとき、可哀そうにと心にかけてくれる人がある。その気にかけてくれている思召というものは、他にあるものでなく、自分に只一人不思議な人がもっている。

金を借りに行って金を借してくれるから有難いと、こういうふうに思っていたところが、親切をかけてくれるから有難いとなって来た。今更に仏の本願ということを思い返してみました。私は「仏というものが信仰をもてと言われる。ところで私にはそれができない。仏のことを聞かされて満足をもっべきなりと思ったが、それができない」とこう思っておったのですが「よろこべない、それが可哀そうだ」「わからぬものだから仏は見捨てない」という話であり、「自分でよろこばねばならぬ、信心せねばならぬと、こう思うことが可哀そうだ」として、その人だけはどこどこまでも可哀そうとして下さる。その可哀そうということのかたまりみたいなものが南無阿弥陀仏ということである——と、わずかだが自分でありがたいと思うようになって来ました。そして「オレがそうなったら信仰だ、よくなったらそれが仏だ」としてかえってかねてからのよび声をみずからくだいてしまっていたことに気がつきました。

私の「やまざるがまん」とは、「自分が立派な信者となって救われよう」と思ったことでした。「立派な信者となれば救って下さろう」と考えた、そこがちがっていました。仏がわかったら、死んだ子が忘れられるかといえば、そうではない。涙の出るにつけ「その自分ばかりをいたわり言い張るその自分」がかあいそうだとなってくるのです。

考えてみますれば、朝から晩まで、自分のことばっかり考えて、「オレだけは助かりたい、〳〵、〳〵」と私がそうやっている。これを天地に神様というものがおられて、人間の性根を見ておられるとすれば「お前は自分のことばかり考えていて可愛い奴」と思われそうにない「にくらしい奴だ」と、神様に横むかれるようなこの性分がとれようとも思わない。さて聖道門の人はこれをとろうとして明け

ても暮れても自分のことを思うている。

ところで、可愛くない人間を可哀そうだとして見てくれる人間、半分くらい真実の友がないでもないと思えてきたわけです。私の「がまんのやまぬのが可哀そうだ」と言われたことが、この憎らしい、神様にも横むかれるような奴を可哀そうと見て下さる方があることを知らせてくれました。

年寄ればよるだけに面（つら）の皮も厚くなりまして、まことに自分自身なかなかひどいものをもっております。それでどんなことがあってもうまく行きません。そういうものが可哀そうだと半点わるく思わぬ広大不思議の御力であります。

兄貴自身気狂いのようになっていたものがありがたいとなって来たものでありますが、世にはこういうことを病む人が何人あるかしれません。兄貴はこの人はいかんとしてつっぱなすことのできぬ人でした。それで私の「がまんのやまぬを見て可哀そうだ」となり、それが私を導いたのでした。それは釈尊のとかれた仏教でありますが、「無明の大夜をあわれみて」は仏願のおこる起源でありまして、「無碍光仏としめしてぞ安養界に影現す」即ち、安養界に阿弥陀如来があらわれて下さり、やがて釈迦牟尼仏として現れたということで、つまり、釈迦は、弥陀の本願がありがたいとして、それを説かれたのでありまして、自分のことを説かれたのではありません。暗かりの世をあわれんだばかりに、無碍光如来とあらわれて下さったので、釈迦仏はこの世に出興されて、この阿弥陀如来の「真実」を伝えるためであり、そのことづてを伝えて死なれたわけです。

そこで、兄貴が、その仏の真実を有難いということがなければ私に伝わらず、そのもとは、お釈迦様みずからが南無阿弥陀仏に救われたことづてが伝えられて来たわけです。

私は、仏とか、信仰とかは人の思いなしだと思っていました。こんな不思議なことがあるわけなしとして、道理で解決できると思っていた。これが、兄貴のことばで人間界にあることがわかって来たわけです。自分の小さい頭に頼り、小さく極限されたものばかり見ている私達ですが、ただこういう話があるぐらいならだめでありますが、実際に一人一人が弥陀の誓願不思議にたすけられるのであります。まことに人間界に何があるかわかりません。人間界に何か本当に続くものがあるかとすれば、何もありません。本当のものは仏の御真実ばかりで、不思議なことです。

さて、仏がわかったから自分がよくなったとこう思うのは本当に頭が下がっていないのです。頭が上がってなけれ

ば、御見すてないとして「ナムアミダブツ」でやらしてもらおうとなってくるわけです。他愛ない夢のような話だといわれればそれだけです。だが、自分が今、自身老体となり死のことを考えぬ日とてないわけでありますが、それにつけて私のようなしようのないものをお見捨てない、それだけをたよりにやらしてもらおうと思っております。

「如来世に興出したまいし所以は」他のものを言いに来たにあらず「五濁悪世の群生海」であるから（お前が立派であるから救うのでなくして）正に如来がこの世にあらわれたこの如実のことばだけがありたがいでないかと、これだけでつきております。

これだけで、以外になんにもない。「よく一念喜愛心をおこしぬれば」、信心徹底の心をおこし、そのものが煩悩を――今生において、活き仏ならば煩悩を断じもしようが、我々は断じることが出来ないままに――これを近頃思っているが……、煩悩が残っているくらいでない、寸分どうしようもない、そのままで「凡聖逆謗ひとしく廻入すれば」仏に敵対し、五逆十悪の我々も、これ一つで花さくのであります。これが如来廻向の南無阿弥陀仏一つであります。この「念仏申さんと思い立つ心のおこるとき」、それだけをありがたいとしていただいたとき、煩悩をもちながら、仏様の涅槃にいらして下さる故、多くの河あれど海に入ると一味のように、慈悲の水の中に一味にされてしまう。

さて「無明のくらがりを破する」とあるが、このことは「我々が気持よくなるもの」ではありません。「気持よくなった」で脱線してはならぬ、どこまで行っても暗がりの中に捨てぬ仏一つを知らされ、「貪愛瞋憎の雲霧」は常にありずめだと書いてあるのだから、自ら気持よくてありそうなものだと思うのがちがうのです。日輪は黒くおゝわれようと、覆われながらもどこまでも捨てぬ大悲一つが貫通しているわけであります。

煩悩……まったく人間という奴はならんとしてもそうなってしまう誠にしようのない奴であります。私も、兄貴に知らされてから二、三年後、自分がよくなれると寸分思わなかったけれど、それを知らされてもよくならず、よけい悪くなっていると思いました。「自力作善の心」でありまして、よくなりたい〳〵の一方が我々の性分であります。さて「どれだけ小心翼々（しようしんよくよく）としたところで、少々横着したとていいではないか」となり、つまり、人の了解をもとめて、自分が立とうとてだめであり、お見捨てぬ人の力を根本としてやるというが強くなるうちどうやったっていいじゃないかと横着していた。ところで仏の慈悲がこわれたとは思わなかったが、兄貴のことがよく思えて、これに自分のことはうまくいかぬ、こればかり気になりました。また、本来人間に差別があるので、驕慢になっていかんわいと考え込み、半年の間ゆきづまりました。それで兄貴に言いましたところ

「人間は一旦わかったと思っても、また間違い、それゆえお呆れないお慈悲じゃないか」

といわれました。間違う奴に間違わぬ話でない、どれだけ間違ってもお呆れない話だ。私が今日まで参ったのはこの一言であります。

今までも、私とて間違わぬことはないのです。とんだところに頭をつっこんでみたりしますが、間違う故かわいそうだとなるのです。私としましても、信仰上、人生上、又人様への感違いもあり、間違いだらけであります。しかしそれだからどこどこまでもお呆れない、それが有難い〳〵に変り、それにひっぱられ〳〵してやってゆくのであります。そのまことがついに形をとってきたものが「南無阿弥陀仏」であります。

私も二十七・八の頃からまことということはよくわかって「南無阿弥陀仏」と口に出して言う必要はなかろうと、この点がいささか疑念でありました。ところが、或時、それは大阪の田川さんからの帰りに途中のことであります。さて汽車の窓から首を出してのぞいていた十二月七日、明日は（大東亜戦の一週年）八日だから、さぞ敵がやるだろうと思っていたとき、しかし小磯さん（時の総理大臣）が、引き受けると言ってくれてるのだから、少しでも国の先のことに希望がもてるかなとも思っていたが、だが、人間界はまことに馬鹿なものだ、こんなはかない、馬鹿気た話はないと思いました。私も仏様の話を聞かされているが、こうして木っ端微塵になってしまうと思ったら「南無阿弥陀仏」と念仏が舞鶴までつづきましたな。

「こんなかわいそうなものゆえ、しっかりしたもの一つ与えておいてやろう」として、仏の最後のものとして与えられたものが念仏であります。我々のために仏の成就された真実であります。これをはなれて何もないわけです。「南無阿弥陀仏」つまり、有難うございましたであります。このときから、だんだんと念仏のことを思わしてもらっています。

「光明は十方世界を遍照し念仏の衆生だけを摂取する」これを有難いとしてくらさしてもらうのであります。念仏の行者は仏の心をいただかしてもらっているわけであります。しかしながら、どれだけわかったとて、どれだけ頂いたとて、死ぬが死ぬまで煩悩の断てぬ我々であります。それを摂取不捨であります。歎異抄にありますように「いかなる不思議ありて」くだけてもうて（しまっての意）「罪

業をおかし」て「念仏申さずして終わるともすみやかに往生をとぐべし」であります。

念仏といえば、念仏とてきゆうくつで一歩も出られぬ、そういう可哀そうなものを、不捨の光の中におさめて、二度とくだけぬようにしてあるぞというのです。教行信証の行巻に「真実の行信をうるものはこれを歓喜地と名づく」とあります。行とは「南無阿弥陀佛」であります。如来の行であります。信とは念佛のありがたさ、信仰の姿です。

気をつけて下さいよ「睡眠し、だらけて居ろうが覚りにいたったものは迷うことなし」と。自力だってこれだけのことがあるとしてあります。「いかにいわんや念佛の行者は佛がかかえてすてぬのだ」とある、かかるが故に阿弥陀と名づくのです、他力というのです。

私も六十七まで来ましたが、人間としてよくはなれぬ、それだから不捨の願を信じたてまつる。何のなすこともなく終るにつけて、今生にこの恵みに会うたことは、何よりありがたいと思っています。

世の中の教において、人間がよくなろうとすればよくなれるとする教は沢山あるが、悪いにつけかわいそうとする教は親鸞聖人以外ありません。どうか「佛がわかって頭が下る教」と「おれはわかったと頭のあがる教」と、「よくなったとする教」と「よくなれない故に頭を下げる教」とよほど見わけてもらわぬばならぬと思います。

世界平和の問題もこれ以外にないと思います。真実のまことは、まことでないものをあわれんで捨てぬまことであります。まことならぬものは、いかぬとして排斥するのが普通ですが、本当にかわいそうとすれば、その人をどこまでもお見捨てない、それにあえば、おのれのまことでないことを知らされて、自分を主張する力がなくなります。釈尊のとかれたことは、道理や理屈ではないのであります。

回　回　回　回

己を疑ふ

柳瀬留治

七十余年来し方見れば迷ひてはあがき苦しみ生き来にしかも
執じては惑ひ悩みぬ迷ひなむ物持つまじと火もて焼き捨つ
堀毛様に返す写真と朱書せしが探せどあらずいかにか詫びむ
もたもたと屑と紛ひて焼きけむか己のしわざ信じ疑ふ
信じ難き己となりて漏れ出づる念佛に伏す地に五体を

回　回　回　回

法華経余話（二）

福島政雄

法華経の最終を飾ると云ってもよいのは第二十五の観世音菩薩普門品（かんぜおんぼさつふもんぼん）、いわゆる法華の四要品の一つとなっております。これは最もひろく普及している御経で、これだけ独立しているように取扱われて、観音経と言われています。この観音の信仰は東洋では最も広く行われているということで、私はそのことを高楠順次郎博士から承ったことがあります。その信仰は広く行われてもそれがどうも迷信に陥っていることが多いようであります。今は普門品の真実の私の感想を交えながら申述べてみたいと思います。

観世音という名が示すようにこの菩薩は世音を観ぜられるというのであります。人生の苦しみの音声を聴くと云うことで無く、見られるのであります。光は音よりも遙かに早いものでありますから、観世音は世の中の人々が苦しみの声を発しない前にすでにその苦しみを見てわかって下され、無限の慈悲を注がれるのであります。観音様というのは仏の慈悲の発現であります。

普門品の最初には、苦悩を受けている衆生が観世音菩薩のことを聞いて一心にみ名をとなえたならば、菩薩はすぐその音声を観じて皆その苦しみから解脱させて下さると述べてあります。此のみ名をとなえるというのはお慈悲が身に徹して南無観世音という声が思わず浮み出るのであります。聞称同時と申しましようか、お慈悲が徹するのとみ名をとなえるのと同時であります。大火に入るとも火も焼くこと能わずとありますが、此の火というのは衆生の瞋恚の炎であります。怒りの火が燃え立っても観音のお慈悲が身にしみているので、その火もやがて消えて行くのであります。大水に流されても名号をとなえたならば、浅いところに行くようになるとありますが、これは貪欲の大水に流されてもお慈悲が徹してその欲の水も浅くなるというのであります。此の事は善導大師の二河白道の喩（たとえ）を思い合わすれば直にわかることであります。火の河、水の河

というのは我々の怒りと貪りとの煩悩であります。それがお慈悲の呼びかけによって、おそろしいものでなくなり、そこに大般涅槃無上の大道が開けるというのであります。それと同様に観音はその無限のお慈悲によって衆生の煩悩を融化せられるのであります。金銀珊瑚の島の宝を求めに行く者が黒風にあって羅刹鬼の国におちいるとありますが、貪りの煩悩の風に吹かれて有の執着や無の執着という羅殺鬼の世界に陥った者が諸法不生不滅という観音の悟りのお慈悲によって執着を離れることを述べられているのであります。或はまた害せられようとしていても観世音の御名をとなえたならば、害しようとしている者の刀が段々に折れて解脱する事が出来るだろうとあります。ここは観音経でも有名なところで、日蓮上人の竜の口の御難と結びつけられたりしていますが、此処の本当の意味は、此の刀というのは貪瞋痴の三毒の刀をいうので観世音を称すれば、そのお慈悲によって三毒の傷害を受けないということでありまして、それを浅薄に解釈して迷信的に受取り、観世音を信ずれば水難火難から助かるとか、金もうけが出来るなどと思うのは大変なまちがいであります。

観音の御利益というのはすべて精神的な御利益であります。手がせ足がせなどというのも煩悩の為に自由がきかないことをいうのでありまして、これもお慈悲の御利益で真実の自由を得るのであります。これは社会的の問題でもありまして三千大千国土の中に満てる怨賊などと云ってあるのも全世界の衆生の煩悩のことであります。それも観音のお慈悲によって転ずるというのであります。無畏を衆生に施し給うとあります。観世音は施無畏者と云われています。

観世音のお蔭で立派な子を生むということも述べられてあります。若し女人があって男の子を生みたいと思って、観世音菩薩を礼拝し供養したならば、福徳智慧の男の子が生れるであろう。女の子を生みたいと思って観世音菩薩を礼拝供養したならば端正有相の女の子が生れるであろう。昔々徳の根本を植えて、多くの人々から愛敬せられる子が生れるであろうと述べてあります。これは胎教ということから考えてそのとおりであると思われます。子が胎内にいる十カ月の間、母親が言行を慎み、慈悲の菩薩観世音を念じて毎日を送りますならば必ず福徳智慧の男の子や端正有相の女の子を生むようになるに相違ありません。私は今の皇太子様が胎内にいらした時、法隆寺に集りを開いたことがあります。その時太子殿で勤行のあとで、佐伯定胤猊下の御発声に導かれて此の箇所を二度読誦いたしまして感激の涙にむせんだことを今なおはっきりと思いおこします。「昔々徳の根本を植えて」とあることが深く感ぜられます。日本国の天子様は仏教渡来以後、仏教が国民にしみ込みま

すに従って、十善の天子と仰がれていらせられます。それは前生に十善を積ませられた御果報で生れながらの皇太子、天皇の御あとつぎであらせられるという国民の心持であります。此の心持が続く限り日本国は真実に生きて発展して行くと信ぜられるのであります。

さて次には観世音の三十三身応現ということでありますが、これがまた深い意味であると思われます。仏身をもって得度すべき者には観世音菩薩は仏身を現じて法を説かれます。これを始めとして辟支仏（縁覚）や声聞や梵王や帝釈天や小王や長者や居士の身を現じ、婦女の身や童男童女の身をも現じ、すべて三十三の身を現じて法を説かれると述べられています。これはどんなことでありましょうか。私としての感じを申しますれば次のようなことであると思います。

お経には沢山の菩薩達の名が出ています。華厳経などには非常に多くの菩薩達の名が出ています。この沢山の菩薩というのは何であろうか、歴史的の人物ではないと思われるがと私は疑問に思っていたのであります。その疑問に答えて臼杵祖山先生の仰せられたことが私の心にしみています。この菩薩達というのは仏陀から我々衆生に対して色々無限の心のひらめきが出ている。その一つ一つの仏心のひらめきを現わしているのが菩薩達であると先生は言われました。それで私には様々の菩薩の意味がわかりました。観世音は仏陀の慈悲のひらめきであります。ところがその観音様からまた衆生に対しての心のひらめきがあるのであります。そのひらめきが色々の人物の或る動きにおいて現れる、それが三十三身の応現であります。それで私共は相接する色々の人々の或る場合の心の動きに観世音のお慈悲のひらめきを感ずるのであります。その時その人は観音様の化身であります。それで私どもは此の世の中において折に触れて或る人の或る時の動きに観音様のお慈悲を感じ、それは一瞬間のことであっても、その瞬間、その人は私どもにとっては観世音の化身であるということになるのであります。

普門品の終に近く長い偈文があります。それは観音経の全体を歌の形で述べられたものでありますが、今それを七五調に訳しますれば次のようなことになります。

世尊は妙法そなえます　我いま重ねて問いまつる
仏子は何の因縁で　観世音とは名つけます
妙相そなえ給う尊　偈をもて答えたもうよう
汝観音の行を聴け　まさに諸方によく応ず
弘誓の深さ海のごと　劫をふるとも思議されず
千億の仏によくつかえ　大清浄の願おこす

略して汝によく説かん　その名を聞きて身を仰ぎ
心念空しく過ぎざれば　よくもろもろの苦を減す
たとい加害の意をおこし大なる火坑に落とすとも
観音力を念ずれば　火坑変じて池となる
または巨海に漂流して　竜魚や鬼の難あるも
観音力を念ずれば　波浪も没することあらじ
或は須弥の峯にあり　推しおとさるることあるも
観音力を念ずれば　虚空に住せん日のごとく
或は悪人逐い来り　金剛山より落つるとも
観音力を念ずれば　損ずること無し一毛も
或は怨賊とりかこみ　刀で害を加うるも
観音力を念ずれば　慈悲を起さん皆ともに
或は大難の苦に遭いて　いのち終らんとする時も
観音力を念ずれば　刀は折れん段々に
或はくさりにしばられて手足をいましめられんとも
観音力を念ずれば　釈然として解脱せん
もろもろの呪いの毒薬に害せられんとする者も
観音力を念ずれば　本人かえって害受けん
或は悪き羅刹など　毒竜鬼に遇う時も
観音力を念ずれば　敢えて害せじ毒竜も
若は悪獣囲繞して　爪きば怖るべき時も
観音力を念ずれば　悪獣遠く逃げ行かん
蛇やまむしやさそりなど火の燃ゆるごと毒あるも
観音力を念ずれば　自然にかえり逃げ去らん
雷や電光鳴りひらめき　ひさめや大雨澍がんに
観音力を念ずれば　時に応じて消え去らん
衆生困厄被りて　無量の苦しみ逼らんに
彼の観音の妙智力　世間の苦しみ能く救う
神通力を具足して　智の方便を広く修し
尽十方の諸国土に　身を現ぜざる刹は無し
種々もろもろの悪趣の苦地獄や餓鬼や畜生や
生老病死の苦しみも　みな漸くに滅せしむ
真観及び清浄観　広大智慧の観ともに
悲観並びに慈観をも　常に願いて仰ぐべし
無垢清浄の光あり　慧日もろもろの闇を破し
災の風火を能く伏し　あまねく世間を照らすなり
悲体の戒は雷のごと　大雲のごと慈意妙に
甘露の法雨降り澍ぎ　煩悩の炎を滅すなり
諍訟の怖れある時も　軍陣に恐れある時も
観音力を念ずれば　怨ことごとく退散す
妙音ひびく観世音　梵音鳴らす観世音
世間の音にすぐれたり　よくよく常に念ずべし
念々疑うことなかれ　此の浄聖の観世音
苦悩死厄の中にして　依りどころとぞなり給う

一切功徳を具えつつ　慈眼をもって衆生を視
福聚の海は無量なり　まさに頂礼いたすべし
慈悲は世間を救いまし　当来正覚成じまし
憂畏の苦しみ滅します　観音様を頂礼す
彼の法蔵比丘尊は　世自在王に詣でまし
修行すること幾百劫　無上浄覚証します
常に左右の辺に侍し　弥陀尊を仰ぎ給いつつ
三昧力を幻示して　供養し給う一切仏
彼の西方の清浄土　安養にして極楽国
弥陀は彼の土に住み給い　調御丈夫の至尊なり
彼の国土には女人無く　不浄の法を見ること無し
仏子即今往生し　すなわち蓮華の蔵に入る
彼の土の無量光仏は　浄妙の蓮華台上の
獅子座にありて白光を　放ちています沙羅樹王
かくの如きの世界尊　三界に等倫無き尊さよ
功徳を積みて礼讃し　最勝人とならん速かに

以上で偈文は終っています。これは無尽意菩薩が、観世音菩薩のことを世尊にお尋ね申上げたのに対して、世尊がお答えになることを歌の形にあらわしたものであります。

無尽意はそこで、此の普門示現の神通力を聞いた衆生の功徳は少くないでございましょうと申し上げ、八万四千の衆生が皆無上の悟りの心を発したということで普門品は終るということになります。

この偈文の中の真観、清浄観、という観音の真実心、清浄心をもって衆生を観し給うこと、広大智慧観も慈悲の観も同様観音の智慧と慈悲とで衆生を見たもうことであります。

法華経は此のあとに、陀羅尼品第二十六で薬王菩薩が衆徳を具えている偈文すなわち陀羅尼を説き、妙荘厳王本事品第二十七では人が誓願をもって法を護るべきを勧められ普賢菩薩が東方から来て、衆生の自行を勧発して守護する誓願を明かすのであります。これで法華経は終っているのであります。

法華経の内容は広大無辺であり、私などの心はその万分の一にも及ばないのであります。今はただ私の感じたところの一端を述べましたに過ぎないのであります。

昭和三十九年十月八日稿了

讃仏の歌

作詞　田端　明
作曲　朝川信夫

「母」

一　涙流して手をにぎり
　母が形見のこの珠数を
　心のささえにしなさいと
　　優しく聞かせてくれた母

二　遠くはなれて住むとても
　慈悲の心はただひとつ
　明るく生きてくださいと
　　優しく聞かせてくれた母

三　たとえこの世で会えぬとも
　弥陀の浄土があるからは
　かならず会わせてくださると
　　優しく聞かせてくれた母

四　涙にぬれたこの珠数を
　胸に抱きしめ母さんと
　呼べば優しく母の声
　　南無阿弥陀仏と呼んでいる

甘ずっぱい母の乳房に抱かれて育った私が、病気になったとき母をうらんだ。瀬戸の小島に捨てられた孤独の私、失明の海底に、もがき苦しむ私の心に、湯たんぽのようにあたたかい背中で聞いた優しい母の声が私を呼んでいた。今も、私の心の中に生きて、母の詞を作らせてくれました

（昭和四十五年五月、白道誌より）

（編者註）

—大勢至菩薩和讃—

子の母をおもうがごとくにて
　衆生仏を憶すれば
　　現前当来とおからず
　　如来を拝見うたがわず

田端さんの詩を読み終るなり、聖人のこの和讃が思い出されましたので書き添えました。田端さんが難病になって御家族と別れて一人、瀬戸の小島に移り、どんなにか懊悩されましたことか。病をにくみ、世をのろい、母さえもうらむという、絶望の渕に立たれての涙の幾春秋の末に、よき御縁にめぐまれて、生死の苦海ほとりなき世に「苦悩の有情を捨てたまわぬみ仏」のおまことに気づかれ、悲喜交々の中に、念仏と一緒にこの詩が自然に浮び出たもので、世の常の単なる筆のすさびではありません。

また作曲者の朝川さんは、発病の当初は神に平癒を祈るなどせられましたが、遂に失明するに及び、聖人の教に心ひかれて、小島に渡ってからはよき人々に手をとられ、特に国のお父さんに護念せられて、お念仏に心のあけぼのを迎えられました。それからは同じ盲人にこの教をとどけたいとの一念から苦労して点字を習得し、信仰書を点訳し、さらに好きな音楽に精進して、桜合唱団をつくり、自分で作曲して、療友を慰問し、仏徳を讃歎して法縁を結んで居られます。印刷の都合で曲譜を紹介出来ませんでしたことは残念でありました。

◈　◈　◈　◈

み仏を讃えて

後藤惟一

み仏のみ名を称えてさすらえる悩病院の長廊下かな
悲しみの涙そそぎて我を待つみ親ありけり濁悪の世に
仰ぎ見る小山の上の松林松の緑のあざやかにして
ひとひらの雲なき午后の秋の空とけいるが如く仰ぎ見つめつ
み仏を歌い讃えし歌人あり伊藤左千夫先生という
めざめては仏のみ名を称うなり今日も生命を守られてあり
み仏の光あまねき海原や誓の船にのせられて行く
罪故に可愛想とのみ仏の慈悲のまに〳〵生くる我かな
よしあしの思いをすててみ仏の慈悲を仰ぎてみ名を称えん

本願成就のみ声（一）

花田正夫

かって私は蓮如上人が『安心決定鈔』を肌身はなさず身読されたことを知り、及ばずながら私も読ましていただきたいと思い立ち、臼杵祖山老師の御著書をしるべにしてどうにか一応読み終りました時

往生は成就しけりとよろこびに
あふるる弥陀の正覚の声

と歎じたことがあります。私共の信心を決定させて頂けるのは、弥陀仏の本願が成就したことを聞く一つにかかっています。たとえば最近ガンの研究がさかんでその薬がいろ〳〵発表されますが、その多くは未完成で、これから動物家験やら臨床例を積み重ね、副作用の害も再発の心配もないことが証明された暁にこそ、ガン患者が安心出来るのであります。そのように私共の往生成仏の道で信心が決定出来るのは、私共をたすけようと思召し立って下さった弥陀仏の本願の成就を、釈迦仏から聞かせて頂くからであり真宗のすわりはこの本願成就文にあります。

ここに、大無量寿経の下巻のはじめに述べられた、本願成就のみ声を仰いで、無明の大夜にさまよい、身から出た錆で、自ら作った罪業の重さに沈みきって浮ぶ瀬の絶えてない私共のために御苦労下さる御恩を謝すよすがにいたします。

第十一願成就の文

仏、阿難に告げたまわく
それ衆生ありて彼国に生れんとする者は
皆ことごとく正定聚（しょうじょうじゅ）に住す
そのゆえはいかんとならば、彼の仏国中には
もろ〳〵の邪（定）聚、及び不定聚無ければなり

この第十一願は「本願を信じ念仏申す者は、みなことごとく浄土に生れる身と定まり、やがて身命を終るとき仏のさとりを得しめるであろう、もしもそれが出来ないならば

られる聖人の尊容を若し仰ぐことが出来たなら、出世本懐を説かれようとする前の釈尊が仏々相念のうちに、身も心も悦びにあふれ、微塵のけがれもなく清くすみわたるお姿で、お顔はおごそかにひかりかがやいていられた、その尊容に通うものがあったと信ずる」といわれたことを思い併せます。

ニイチェは「師よ、師よと徒らに追従することだけが師につかえる道ではない。すみやかに師の冠を取って着よ、その時にこそ師は本当に喜ぶであろう」と云っている。

山岡鉄舟居士は一刀流の名人浅利師について武道を学びすでにその技倆は師をしのぐまでになったが、師に立ち向うと、師の剣が邪魔になって、どうにもならぬ壁にブツつかった。そこでもう技ではない、心であるとなって、滴水老師の導きをうけて心眼がひらけると、師の剣の幻影は消えた。その時浅利師から奥儀を許されたのである。禅家の「廓然無聖（かくねんむしょう）」とは、こうした消息であろうかと、これも他山の石として思い出しました。

彼国に生れんとする者

さて「彼国に生れんとする者」とありますが、私自身の生活は、愛欲と名利のやつことなっていて、浄土を願う心も無い身を省みさせられ、猫に小判、豚に真珠とよく言われるように、心がそちらに向かないのであります。

これについて聖書に「蕩児帰る」の譬があります。父から貰った財産をなくしてルンペン同様に落ちぶれた放蕩息子が、そうした苦境にあって、父を思い起し、自分の罪をわびて帰ると、父は一切を許してよろこび迎えるのであります。

これにくらべ、法華経の「長者窮児」の譬では、長者の一人息子が親を捨てて町に走り、やがて失敗を重ねて零落し、日傭いの生活になりました。親は八方手をつくして探しますが見出せないので、親は子の帰りを待つて、家産を増し、豪壮な邸宅をも新築するのであります。そこを通りかかった窮児が窓の外から、金銀で飾られた獅子座にあって、沢山の侍者にかしずかれた父を見るのでありますが、それが父であることも知らずに居ります時、父は窮児を見て、我子であると直感し、いろ〳〵方便して家に引き入れ冷えきって、ひがんだ心をあたため育てて、長者百歳の時に、親類、知己を招いて大宴会を催し、そこで親子の名告りをあげて、全財産を子に譲るのであります。

更に法華経に「火宅三車」の譬があります。そこではメラメラと燃えて今にも崩壊しようとする大きな古い家にあって、子供達が遊び興じておるのを見出した親が、急いで安全な場所に出よと呼びかけても一向に耳を借しません。そこで「ここに牛車と鹿車と羊車がある、早く出て来た者

仏とはならない」との法蔵菩薩の誓いであり、その願が成就されたよろこびの心を以上のように述べられたのであります。

聖人独特な訓み方

先ずここで「彼国に生れんとする者は」の一句に着眼します時、刮目させられますのは、親鸞聖人以前の高僧達は「彼国に生れなば」と訓まれていたのに、聖人は「生れんとする者は」と独特な訓み方をされていることです。今までの訓み方では、私共が浄土に生れてのちに正定聚の位に住すことになりますが、聖人は、この世にあるまんま、正しく浄土に生れるにきまった身とさせて下さると訓みとられました。これでなくは死を待たないでは決定信は獲られないことになり、臨終の来迎を待つとか、臨終の正念を祈るというあてよろこびや、悪あがきをせねばなりません。

聖人は、この他「至心に廻向して」を「至心に廻向したまえり」と十八願成就文のところで訓みとられておりますし、善導大師の御釈でも「外に賢善精進の相を現じ、内に虚仮を懐くことを得ざれ」と読まれたものを「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮を懐けばなり」と訓みとられましたことはあまりにも有名であります。こうしたことで、浄土宗から「師に背いて、自説を立つ者」であるときびしく非難されたこともありましたが、これは決して聖人の自見の覚悟から徒らにめずらしい訓み方をされたのではありません。これは明らかに仏智を信じられ、仏の不思議な智慧が満入して、信心の智慧とあらわれた上の聖人のおのずからな確信のあらわれであります。歎異鈔の第二章に

「弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。仏説まことにおわしまさば、善導の御釈虚言したまうべからず。善導の御釈まことならば、法然のおおせそらごとならんや。法然のおおせまことならば、親鸞がもうすむね、またもてむなしかるべからずそうろうか」

とありますが、世間一般の常識からいえば「聖人の聞き方に間違いないなら、法然の仰せはこの通りであり、法然の受け方に間違いないなら善導の御釈はこの通りであり、善導が仏意を正しくうけられているから、その御釈は仏意そのままである。釈尊はまた弥陀仏と仏々相念の一味にとけられての説教であるから、弥陀の本願のまことをそのままの説教である」となる筈ですのに、その逆なことが、水の流れるようにさら〳〵と述懐されたのは、聖人のよき人に開眼せられた信光は弥陀仏に直結されて、そこに釈迦仏と七祖方とにおのずから一味になつているからであります。池山先生は歎異鈔のここを指適されて「このように語

に与えよう」と叫ぶと、子供等は競って飛び出し、親に車を求めるのであります。親は子供等が安全なのを見て非常に喜び、一様に大白牛車を与えるのであります。

以上の譬で知られますように、聖書では父を子は知っていて、自ら悔い改めて帰るのでありますが、仏典では親を忘れ、自らの悪も知らず、自分の危険もさとらずに遊びたわむれている子供のために、親は色々と方便をめぐらして漸次に仏のさとりの境界に導き入れるのであります。

ここに、あの目にうつる私共の姿は「親を知る力もなく自分の悪にも気つき得ない、目も無く、足も無い者で、そのままでは永遠に闇黒の苦海に沈みきって浮ぶ瀬のない者」であります。それを見抜かれるが故にやむにやまれぬ大悲大願を建立し成就して下さったのであります。この本師本仏の御念力に催されて、子が親にひかれるように、仏の本願力によって、彼国に生れんとする心を発起させられるので、これは私共の心であって私共の心でない、全くの他力であり、願力の自然のひくところであります。聖人は「いずれの行も及び難き身」と信知せられては「至心に廻向したまえり」とその仏恩を謝しておられます。

皆悉く正定聚に住す

正定聚とは、正しく浄土に生れ、成仏させて頂く身と仏だまる人々であります。近角先生は、親心にめざめた囚人の心にたとえられました。親のまこと心が身にしみても、刑期の満ちるまでは親の家には帰れませんが、心はすでに親のふところに帰るのと同じ趣があると言われました。

さて、二千五百年の仏教歴史の上で、正定聚、不退転の境を求めて無数の仏教徒は求道、聞法、修行してきましたがその中僅かの人々が、菩薩のさとりを得て、やがて仏になれるという光明を見出して不退転の身を喜ぶとあります。しかしまだ成仏へ〇道は遠く、そこに種々の難関が横たわりますが、漸次に克服して行きます。そうでありますが、それでは何年後に成仏出来るかといえば、最上位の弥勒菩薩、もう紙一重で仏に成れるまでに達しながらも、五十六億七千万年の後に成仏すると経に説かれてあります。

まして我々凡愚の身には、声聞、縁覚の低いさとりの境界も達し得ないのでありますが、不思議にも、よき人に導かれて、この凡愚を悲憐されての大願を聞き、仏力の不思議によって、間違いなく往生成仏させて頂けますことは無上の歓喜であります。実際には煩悩にさえられてそうなれませんけれど「天におどり地におどりても喜ぶべきこと」であります。

前にのべましたように、またたとえ、菩薩のさとりを得ましても、無数の難関と気の遠くなるほどの歳月、しかもその期間も定め難い、のちの成仏とあって見れば、竜樹仏

薩も、天親菩薩も、難行をすてて易行につき、聖道をさしおいて浄土に一心帰命せられたのも、理の当然とうなずかされます。竜樹和讃に

一切菩薩ののたまわく我等因地にありしとき
無量劫をへめぐりて万善万行修せしかど
恩愛はなはだたち難く生死はなはだつきがたし
念仏三昧行じてぞ罪障を滅し度脱せし

とあり、善導和讃には

仏法力の不思議には諸邪業繫さわらねば
弥陀の本弘誓願を増上縁となづけたり
願力成就の報土には自力の心行いたらねば
大小聖人みながら如来の弘誓に乗ずなり

とあります。

彼の仏国中に邪定、不定聚無し

邪定聚とは、諸善万行を修してその功徳の力で往生しようとする人々でありますが、真剣に善を積み、行を重ねて行けば行くほど、身のあさましさ、つたなさが知れて、ゲェテの所謂「無力であるが不滅な願い」と知らされ、「大空を願いながら翼の無い鳥」の悲歎におちます。福島先生はここを「一角自分は善いことをしていると善をたのんでいるが、仏様の御心には、その空しさを知られて、そうした心を打ち砕いて浄土に迎えいれようと、御自ら聖衆と共に臨終に阿弥陀仏があらわれて下さるのである」というようにお味わい下さいました。

次に不定聚とは、諸善万行はとても駄目と見当をつけて大善大功徳の念仏を称え、その功徳をもって浄土へ生れようとする人々であります。しかし称名の一行に向います時称え心が問題となって来ます。そこで自分が心もやわらかになり善い心もしきりおこると、これでこそ往生間違いなしと思い、逆縁にふれて、煩悩の生地のまる出しとなり、腹立ちと愚痴の交錯する暗さに沈むと、こんなことではとためらい疑うようになります。そこで性こりもなく百方手を尽くして心をよくしようとしますが、それは賽の河原の石積みで、はかないいとなみに終ります。そこに臨終に正念を祈るとか、臨終に来迎をたのむという、あてよろこびや悪あがきが続き、はてしないぬかるみの連続が定めであります。聖人が叡山で常行三昧堂の堂僧として、念仏三昧を行じていられたのに、遂に断念して山を下られたのも、この壁にぶちあたられたからであります。

善導、源信すすむとも、本師源空ひろめずば
片州濁世のともがらはいかでか真宗をさとらまし
曠劫多生のあいだにも、出離の強縁しらざりき
本師源空いまさずばこのたびむなしくすぎなまし

と有縁の知識に導かれて、如来の選択された本願念仏を

聞きとられ、疑いの雲が破られたのであります。

邪定、不定の状態は、結局、自分をよくするという一点に心をひそめて、或は万行、或は一行とはげむのでありますが、自分自身は、瓦礫の身とて、磨いても〳〵玉にはなり得ないのであります。ここにこの駄目な身をかねてから知り尽して下さる弥陀仏のさしのべられた御手をよき人を縁として信知させて頂く時、仏の思召しにしたがい、善も悪も業報にまかせる道がひらけます。世にいう三願転入とはこうしたおもむきであります。

しかし私はここで、矢張り他山の石として、キリスト教の最後の審判を思い合せます。キリストが地上に再誕して信ずる者は天国に導き、不信の者は煉獄におとす、とありますが、弥陀仏は、幸に人間に生れ、ありがたい仏法にあい、本願の念仏を聞きながらも機縁が塾さず、邪定、不定のところに彷徨する者を、地獄におとす、というのでなくその者をも、浄土のかたすみに導き入れて、そこで育てあげて必ず真実の自由と智慧のかがやく仏とさせずばおかぬとの御誓いがあります。このことは何というありがたいことでありましょうか。入学試験に失敗した子供を親は捨てずして、予備校に通わせ、やがて必ず入学出来る身にさせずばおかないのであります。ここにも仏の無窮の願力、広大無辺なみ心を仰ぐのであります。

聖人は「摂取不捨の故に正定聚に住す」と教えられます。そこに本願を信じ念仏申す者は「心光照護の益」をこうむるとも説れています。親を全に忘れ、親にあっても親を知らず、迷いに迷う私共を、たずね〳〵て下さるみ仏はやがて、大いなるみ心の中におさめとって下さり、常に護り照して下さって、浄土に導き入れ成仏させて頂くのであります。この弥陀仏の御光の中におさめとられての信の旅が正定聚の位であります。やがては真実の仏のさとりをひらかせて下さるのであります。

しかし、それでは正定聚に入れば、立派なものになれるがといいますと、そうではなく、この肉体のある限りはもとの黙阿弥で「よくもおゝくいかりはらたちそねみねたむこころのひまなくして臨終の一念まで、きえずたえずとどまらず」と聖人が仰せられる通りであります。悪重きにつけてもいよ〳〵本願を仰ぎ、障り多きにつけてもます〳〵御名をたのむばかりであります。

別府の妙好人、安波勲八医師が辞世の書に「仏の慈悲を有難く思える様になったことが有難いのではない。有りがたく思えぬ奴を相変らずお相手下さることがありがたい事である」

とありますのは、信の底をたたいてのお味わいであります。

未完

あとがき

八月は近角常音先生の御忌月でありますが、幸に杉藤さんが、御晩年の大阪の田川邸での御法話を筆記して下さっていたので、ここに七月号にいただきました。先生の信生活を貫ぬいた三つの大きなお気づきについて詳しくおのべ下さってある貴重な御法話であります、私自身そこに大きな指針をいただいております。

福島先生からは「雪ぼとけ」の玉稿をすでに頂いておりますが、印刷の都合で、「法華経余話」を続けました、御諒承下さい。先生すでに数えの八十二歳になられました由、法味ゆたかなお言葉でお導き頂けますことは何というありがたいことでありましょうか。

蓮如上人の八十二歳の時の御詠は

春立ちて又や年へむ老楽の花にはえにし
我身なるらむ

つれなしや今年の冬も打暮て八十にいまはふたつあまれば

弥陀たのむ心ひとつのたふとさにいつもうれしき涙なるかな

ふしぎなる弥陀のちかひにあふもなをむかしののりのもよほしぞかし

いくたびかさだめしことのかはるらんたのむまじきはこころなりけり

となっております。八十五歳でお亡くなられましたが、釈尊のお年をこえ、祖師のお年に近くなられての御法悦の姿に、無限のはげましを蒙ることであります。

世上の喜びは有形無形のものを身辺にあつめて楽しみますが、仏法には夕陽が西に没して四囲がくらくなる時、星と月がいよ〳〵その光彩を放つような不思議な味いがあります、これあってか、馬齢をいたずらに重ね、老化、老懶の身にせまるにつけても、仏語の身にしみるのをおぼえます。

それかといって、若い時には仏法は無用かとよくいわれますが、唯目前のことに追いまくられ、急いでよい学校とか立派な職場を得ても、たとえば汽車、しかも新幹線の特急に乗っても、自分の行先きを知らないでは、全体が空しくなります。仏法の鏡によって自分を照らされ、人生の帰趨を見出すことは緊急なことであります。

御案内

○毎月第一、二、三日曜、午后一時半　一道会例会
市電、新郊通一丁目下車東入ル　三筋目左入ル

○毎月二十四日。午前午後。教西寺　法話会
昭和区小桜町。市電、御器所通り下車
市バス、北山町下車

定価　半年　二百五十円（送共）
　　一年　五百円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八　花田正夫
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　吉野穂志郎
発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七

慈光第二十二巻第七号　昭和四十五年七月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可